

コスモス

31

第4次
1980・11

作品

近藤 計三	7
押切 順三	8
伊藤 正斉	9
西 杉夫	10
木原 実	11
村松 武司	12
長谷川七郎	13
宮田 正平	14
寺島 珠雄	15
河合 俊郎	16
秋山 清	16
吉田 欣一	18
申 有人	19
緒方 宗平	20
高島 洋	24
山野 チエ	27
野口 清子	28
和田 英子	29
向井 孝	30
小宮 隆弘	32

コスモス全国同人会
遠地輝武研究
友だち

秋山 清	24
松永 浩介	23
村松 武司	21

コスモス雑記

2



定価 五〇〇円

全国同人会雑誌

清水 清

今度のコスモス全国同人会は、やることに反対ではないが、是非ともやりたい気持でもなかったが終ってみると、やはりやってよかった、と思っている。東京同人会

で、まだ案の段階で、長谷川七郎が仲間であるのに顔を知らない人もあり、顔を知るだけでもいいではないか、と開催賛成意見を出したが、そういうことも成果のひとつではあった。もともと発案は九州の内田博ときいているが、コスモスの同人も歳のいった者がだんだん多くなっているから、一期一会の思いもあつたかもしれない。神戸の近藤計三や大牟田の小宮隆弘は初めて会つたのだが、言葉をかかず機会を持てなかつたの

は惜しいことだつた。もしかして来年もまた開けたらいいな、と今は思っている。

第一日の秋山清の「コスモスの人民詩精神」についての報告のとき、ふと気がつく隣りの伊藤正齊が、ノートに秋山の顔をスケッチしていた。割り合い似ているなどと思ひながら、大昔に自分も学校でこんなことをしたの思い出す。伊藤の鉛筆の動きをチラチラ見て、なんとなく気持のほころぶものがあつた。

第二日は午前十時開会なので、朝起きのつらい私は、相当努力して出かけたが、乗物の都合がよすぎて、四十分も早く着いてしまひ時間つぶしに中野駅前の商店街に店を開けている喫茶店をみつけ、入つて行くと、河合俊郎がコーヒーをのんでいた。ちよつと驚いた。前夜の懇親会では、いいかげん酔つて先に帰つた河合が、ひとりでコーヒーをのんでいる図は、それなりにサマになつていて、楽しかつた。午後討論の折、吉田欣一が激しい口調で発言し、私は思わず拍

手した。吉田が何を云つたかよくおぼえていないが「若い奴らに任せよけるか」というようなことを怒つたように云ひ、何しろ吉田の声は気魄にあふれていて、その元氣さに敬意を表したくて手をたたいたのだが、私のほかは誰も手をたたかなかつた。

最後はコスモス30号に載つた申有人の詩「光州」を具体例としてかなり時間をかけた批判があつて面白かつた。特に向井孝の批評は鋭くて感心した。

全国同人会は二日目の予定を時間延長してなお時間の足りない感で終つた。成果の有無は、それぞれの同人が自分の胸に問うところだろう。秋田の押切や北本は病気で来られなかつたが、彼等が出てきていてくれたらもつとよかつたのに、残念である。

砂利と碎石

寺島珠雄

某日、西へ走る国電のドアのそ

ばに佇つていて、電車が或る駅で停つたとき、眼下になつたとどりの線路を見て急に考えた。レールがあり枕木があり、その下に小石が厚く敷きつめられていゝわけだが、その小石、かつては幾分かまるみを帯びた自然の砂利であつた。しかしいまは碎石、角立つた、機械でその大きさにされた石である。かつての砂利は一つも見えない。

それからは走っている間も氣をつけていたが全面に碎石で、まじつていゝ程度にもかかつての砂利は見えない。またそこで連想することがあつた。

土建現場(主に建築)で働らいていたのは近い過去だが、何年ぐらゐ前ともきめかねる時期のこととして、コンクリートに使う砂利が碎石に変わり、仕事がいゝにくくて困つたことがある。この場合、砂利・碎石ともに線路に使われているものよりずつと小さいが事柄の性質は同じだ。現場を離れてしまつたので、いまコンクリートに何が使われてい

るかわからない(尋ねるわずかな手間を惜しんでいる)。しかし線路の石が碎石ばかりということなら、おそらく状態はこれまた同じだろう。

さらに、その碎石の上に並んだ枕木が、いまはほぼ全面的に実際は「木」ではない。こちらはコンクリート製らしい白っぽい規格品で、よくよく見るとレールの継ぎ目のところだけ正真の枕木が入っている。

枕木はひとまず別として、その下の石は、いつもまにかこうもきつぱりと碎石ばかりになつたのだろうか。

北海道、オホーツク沿岸を走る湧網線とか、炭鉱地帯を走る幌内線とか、あるいは四国・九州のローカル線までもすでに碎石ばかりなのだろうか。

考えがあたりこちこち飛ぶうち、今度は人の顔と名と情景がふつと浮んできた。

顔はたくさんで、どれもこれも陽やけの限界を突破した色具合、名はそのうちの二人、金坂と今関

で、情景は小私鉄の保線工夫の詰所、古枕木を焚くちろちろ火のそばにみんないた。太平洋戦争後すぐの十二月、小私鉄に労働組合をつくる相談のはじめだつた。

金坂氏は工夫長、私には父親のような先輩の人だが組合結成大賛成で急進不可の駅長と対立した。どつちも、もう死んだらう。

あのときあの私鉄では保線工夫一人に平均すれば二軒ほどを担当していたことになる。そんな計算も出てきた。無論砂利の時代だ。

以上、今回書いてみようと思つてダメだつた詩を散文にした。粉飾なしの「車中偶感」である。

ナナカマド

木原 実

九月のはじめ北海道ではナナカマドが赤い実をつけていた。札幌でも、札幌から富良野までの長い国道筋の道ばたでも、赤い実をつけたナナカマドをみた。「雪がきたらこの実がきれい」と、案内

の若い友人がはなしてくれた。焚火をするときこの木の枝を下に敷く。七回カマドに入れても燃えきらないのでその名があるというのには、どこかできいたことのあるようなはなしだつたが、かれは無邪氣に、「本州にもナナカマドありますか」とわたしにきいた。

北海道から帰つてコスモスの全国同人会があつた。はじめてのことで、遠方の人たちと顔をあわせるのがたのしかつた。同人雑誌で同人が顔をあわせるのはあたりまえのことだが、ふだんはなかなかできない。

久しぶりの顔をみながら、そして秋山清の第一日目の報告をききながら、コスモスの仲間たちというのにはナナカマドみたいだと、北海道できいてきたはなしを思い出していた。雪がくれば赤い小さな実が美しくはえる。七たびカマドにくべられても、くすぶりつづける生身のシンのつよさ。そういえば人民詩精神なんというのもそんなことと、ひとりで合点してそんなことを考えていた。

間もなく冬がくる。同人のわたしの仲間たちよお元氣で。ナナカマドの赤い実のような「コスモス詩集」をつくりましょう、というのが同人会を終つてのわたしのあいさつである。

行きちがい

和田英子

8月の中頃相ついで詩集が届いた。いい詩集なので涼しいうちに札状を書くことにした。思いの外調子がよく、つまづきが少ない文章が書けた。続いて一冊、書き終えた。三冊目へと、詩集を繰っているうち、気温はあがり、頭の中の電池が不足しだし、前へ進まなくなつた。これまで、と本をおさめ、疲れからくる頭痛をなだめて一日が過ぎた。

あくる日も体の調子は戻らなかつた。夏バテである。封書を投函するとき、相手方から、何か言ってくるだろう、と予想しながら投函した。

が何の音きたもない。むしあつ
い日がつづき、他にすることも山
積して日が過ぎた。三冊目の詩集
の返事は、きつかけを失ないまだ
出さずにいる。

9月に入って、会があり二冊目
の著者に出会った。あとに送った
小冊子の札を言われ、つい「詩集
の返事よんでくれた」と尋ねた。
「ええ」と言ったが、よく聞くと
詩集を発送する前後に、妹さんが
大病をし、つきまりの看護で手紙
など読むどころではなかったとい
う。

もう一人の詩人も、怪我をして
入院なさっているらしい。
間が悪いのである。同じときに
書籍小包を東京へ発送したが、一
向に返事がないので、どうなっ
てるのだろうか、思っていると、二
週間以上も経って、くたびれたか
たちで返送されてきた。

町名を三字書きおとしている。
これでは先様に届くはずはないの
である。己れの失敗には寛容で、
開きませず、そのまま机の上にお
いている。再包装は先のことであ
る。

ういうことを含めてモダーニズム
の積極的なものはないのか、無視
していいのだろうか、ということ
に、いま一度の想いをめぐらせて
みるのも、あながち無駄ではな
らうと思う。

やっぱり、そこでいつまでも若
僧の論理をふりまわしたいもので
ある。

話しあうたのしみ

伊藤正斉

一冊の本を署名して渡し
一冊の本に署名して受け
おもしろいソバなど御馳走になっ
て辞して来た家。
垣根を立てに柵(ひいらぎ)の
葉のくろぐろと茂る下
白く米つぼ様の花もあり

これは秋山清の詩集「季節の雑
話」という詩集の中の「冬一日」と
いう作品の終りの部分である。私
は今度のコスモス全国集会で機
会があったらこの詩の朗読をしよう

る。

つい先だって、遠くに住む友人
からハガキが来た。
「何度か手紙をかきかけて続かず
投函に至らなかった年月が重なり
……」

考えれば一年余り便りはなかつ
た。彼女は投函に至らない手紙を
かいて、気持のケリをつけ、届か
ぬ心情を、もどかしく脚色しなが
ら、こちらの一年が過ぎたのであ
る。
周辺には、行きちがいが多すぎ
る。

若僧の論理

近藤計三

考えてみると、いまぼくが仕事
をしている(演劇)の世界では、
久しく論争らしい論争もないのに
不思議な気がしている。既制演劇
に対するアングラ的な演劇論も、
しよせん既制的なものへの全的否
定論であって、既制側からの対応
もないままに並列化して相対的な

安定のなかに風化していくさまは
奇妙な現象という他ない。

ついさいきんも、文学座の演出
家である木村光一が、劇団の主流
と創造上の意見が対立し、脱退し
たと新聞などで報じられていた。
しかし、その創造上の対立とはい
かなるものか、どこでも、まるで
触れられてはいない。劇団でも、
ジャーナリズムでも、またことあ
るごとに運動論をあげつらう労演
側でも、どこからもその本質的な
問題点を明らかにしようとはしな
い。

先日、文学座のある人に、そ
のことで質問をぶつけてみたのだ
が、もうかなり以前からの問題で
いまさら……といったような劇団
の態度の返答がなされたのには、
ちよつとがっかりしてしまった。
それが、オトナの論理というもの
か。まあ、こんな質問をあえてす
るべくなどは、まったくの若僧な
のであろう。そして、反面では、
やはりアイツは……といったレッ
テルを貼られているのかもしれない。

ことのない同人諸氏におあいでき
ることであった。すぐれた愛妻の
詩を書いている九州の小宮隆弘さ
んにはおあいすることができたし、
申有人、山野子エさんとお話を
する機会にめぐまれた。「うんま
あ」を送っていただいたいた梅田
智江さんにも神戸の和田英子さん、
菅沼瞭子さんにもおあいしたかつ
たのに、梅田さんは同人をやめら
れたときいきみしかつた。

なんといつてもさみしかつたの
は来るといつて来られなかつた宮
田正平さん、二日目もついに顔が
見えなかつた。それに東北の押切
順三さん北本哲三さんにもお会い
できなかつた。押切さんとは前に
「詩の歴史的展望」という題でコ
スモス二〇周年、第三〇号記念で、
日比谷図書館で詩書の展示会をや
ったとき、おあいしたことがあつ
たが、北本哲三さんにはまだ一度
もお目にかかっていない。吉田、
錦などと一度秋田へのりこむかな
どと話しあっています。

こうした発想は、なにも昨今の
ことではなからうが、とくにこの
ごろでは、それですませてしま
うことが多いような気がしてならな
い。無反応と無視の根源となつて
いるきめつけの態度は、そのまま
自閉的な発想に通じているのかも
しれない。

自閉的ということというなら、
「詩のしんぶん」第28号での小熊
秀雄を語る会にふれた記事でも、
ぼくはちよつとひつかかつてしま
う。「それは、小熊詩は、「モダー
ニズムから抜けきつていないので
はないか」という軽口へのアイロ
ニックな批判とならう。」と書か
れている、きめつけた表現で、「モ
ダーニズム詩の戦争論への転落」
という「それは」への否定的なこ
だわりについてなのである。たし
かに、小熊詩に孕み抵抗力は戦争
論と無縁ではあるが、その無縁さ
を削り出した小熊詩に介在するブ
ロレタリア詩の「ひよわさ」を逆
転させるエネルギーとなつたもの
は何だつたのか、初期の小熊詩に
みられるダダイズムとは何か、そ

呑気にすぎ

秋山 清

呑気になりすぎているような気
がする。君たちもぼくも。

ふとそう思いながら、わけても
自分についてそういわねばならぬ
と力を入れて叫びたくなる。しか
し、さらばといつて何をどうすれ
ばいいのか、現実性のある実体は
一向に掴めない。呑気に生きると
心ふかく定めたのであれば、それ
でもいいのだが、そう覚悟などし
ているとも思えないのだから、日
ごろ言っていること、考えることも
根底から信用できにくくなる。人
についても、自分についてもであ
る。そしてひどく疲れたような思
いがして、どたりとそこらあたり
に身体を投げ出して、ねむり込ん
でしまうことがつづく。どこかち
つぽけなヤケがある。おれはもう
あと幾年あくせくしたら事が済む
のか。人に、これからですよと励
げまされると、何いってやがる、

もうアトがないよ、と悟りきつた
みたいなきを口にす。こいつ
は何とも鼻もちがならん。「もう
あとがない」は解りきつたことで
あつて口でいって見ることはな
い。

本当に自分を安心させることは、
自分で納得のできることを自分に
課すること以外にはないだろう。
何もやりたくないなら一切を自分
から中止すればいい。それが責任
あることといえるだろう。

人に連れられて自動車にのつて、
半日ほど歩きまわつて来た。沼や
海や川、見る風景が変化してゆく
ままに、自分の不安をこれにあず
けて、今日一日から解放されたよ
うな思いに浸たろうとしたが、野
原に夜が立ち込めて来ると一日が
たつたのだな、と自分に言いきか
せていた。確実に、ぼくは、自分
について責任を持つてはいないん
だな、ということも思つたりした。
コスモスの全国同人会るとき、ぼ
くはひどくその二日間が自分とか
かわることが深くないという思い
がした。自分のいうことも不徹底、

同人諸君のいうことも不徹底、と
すれば、今のわれわれの生き方に
現在以上を求めるとを誰もがあ
きらめていた証拠かもしれない。
人民詩精神などと言いはしても
どこまでそのことを主張している
か、求めているのか。

むろんよその雑誌よりもコスモ
スがダメだなんて、とんでもない
卑下を、してるんじゃない。

(80・10・1)

自由な詩作の解放

高島 洋

こんどのコスモス大会での秋山
清の人民詩精神についての発言は、
その基底に深い配慮のあることを
私は理解させられた。

コスモスには反権力という一応
の諒解事項があるけれども、必ず
しも反権力的なものを含んでいな
ければいけないということにはな
らない。全く自由に詩作されなけ
ればならない、全く自由に試作す
ることによらなければ新しい芽は

出て来ない。勿論それに批評が伴
わなければ。というのが秋山清の
意見であつたように私は受取つて
いる。

そうすると前号で暮尾淳が長谷
川七郎の言葉として紹介している
「コスモス人民詩の許容の限界」
などという言葉はコスモスに何か
枠があるというように聞えるが、
秋山流に解釈するとそのような言
葉は必要なしということになりそ
うである。

暮尾淳が抒情詩をかいて新しい
抒情の質を創造するとき、それは
またコスモスにとつてプラスには
なるといふことなのだともう。

たとえばかりに同じモチーフで
同人が一せいに詩をかいたとして
も作品として現われてくるものは
夫々の容貌のちがいと同じように
ちがつたものになるだろう。

ある意味では、だれでもじぶん
の詩をかえるということとは不可
能とは言えないけれども大変な努力
を要することはだれでも痛切に経
験している。そこに自由な詩作の
解放ということが鍵になつてくる。

散歩はたのし



一期一会

近藤 計三

フロントの

ぺしやんこに潰れた乗用車が一台

野晒らしで放置してある。

朝露に濡れた夏草が

もう覆いかぶさっている。

カセット・テープのヴォリュームいっぱい

ラジオ体操のリズムが響き

衝撃ってなんだつたらうか。

こどもの仕草を真似て

背を反らしたり曲げたり

捻じつたりしながら

少年期の野っ原があつた。

一期一会の

こども群輪が横で

威勢よく腕を振っている。

そういえば俺にも

いまなお消しゴムで消えない筆圧の

衝撃ってなんだつたらうか。

こどもの仕草を真似て

背を反らしたり曲げたり

捻じつたりしながら

俺は伸びかがみする影を追っている。

鼻っ柱をへし折られる

そんな弾みもあつたか。

ひしゃげ打ち捨てられた鉄錆の残骸を

横目で眺めると

夏草の根っこで

硬化ガラスの破片が煌めいている。

夢のポケットからこぼれた

俺のビー玉みたいだ。

朝の会話

押切順三

―円座というのか、
草を編んだ敷き物、一枚つきり、
板敷き、板張りの部屋があつて
そこで寝起きしているのか。
一日の朝、
てのひらで汲みあげるほどの
時間がほしいと願つた。

―小さな結節と停滞、
小さな浸潤が始まつていた、
不意に膝を折つて転ぶ。

―これはなんだ、
あけびつるで編んだ背負い籠だ、
背負い籠だから
背中にあたる一方にしか
取っ手がついてないのだ、
これはなんだ、

蓑というものだ

みの・かさの蓑だ、これは飾りもののミニだ、
こんなものを、なぜ玄関に置くんだ
玄関戸をひいて、いま
旅から帰つてきたところかも知れぬ
背負い籠に詰めこんできさ荷を
そこらへんに散らかして、
見えるか。

―蓑着て、背負い籠を負うつて
玄関戸をあけて
これから旅だ。
背負い籠になんの荷もない、
往くも帰るも
思えば短い旅でないか、

―花鋏をもつてどこへ行く、
花殻を落しにいく。
バラの花が長雨に腐つていた、
昨日のことであつたか、
いや、ずいぶん前の日のことであつたか、
それが黒く首を垂れていたのは。
いまは朝、
日常に立ち帰つて
私は、花鋏をもつて。

小詩 コスモス

伊藤正斉

*
頭をさげて奮然とつかかかつて来る
春さきの仔山羊の一途さ。

友人たちにも先を越され 神さんにまで死に急がれた
秋山清の 仔山羊の一途さが気にかかる。
敬老の日の 中野「サンブラザ」五階 「カトレア」
の小会議室。

人民詩精神よこんにちわ。
東北は冷害 北本哲三と押切順三の顔が見えないのが
気にかかる。

東京駅の階段を のぼりおりし 河合と吉田におくれ
まいと 汗こぼして歩くなさけなさ。
六十八年目のこのおれをみてくれ。
天皇と馬に いまだ 金しぼり。
何が自由か
反権力か。

火のついた車に 呉越同舟。

何がオイルショックだ 不景気だ というなかの物価
高。

コスモスもまた火の車。

夜は新宿の「モッサン」
ゆうべも震度三〇四の地震があつた。

一日 二百万人余の乗降客のある新宿駅におりたつて
さてモッサンは大丈夫か。

先日 悪質バーで わずかな酒を飲んでひつかかり
逃げそこねて死んだ若物がいた。

こわい新宿。
新宿モッサンは飲みほうだい 食いほうだい
栗飯の天狗もり。

喪中の秋山清もうたつた 申有人もうたつた。
申さんよ うたえ叫べ 誰にえんりよがいるものか。
光州を

日本の光州を
自分の光州を。
あてこすりの 逃げ腰の 遠吠えの諷刺など
クソクラえだ。

*秋山清詩集〈季節の雑話〉「この春」より。

始末記

西 杉 夫

迫るブルドーザ、
ちよつと先はもう整地がおわって石垣だ。
轟音をひびかせて
開発がみどりを追いつめる、
すりつぶす。
わずかに残った草と木のひとかたまりは
あと何日もつか。
そのなかにただ一本、
小ぶりのたらの木。
意外にひろがった根を
棒切れでほじくりだし
さいごは根元をにぎって
力まかせに引っぱりあげる、
みしつと音がして

あたりをそめる青いにおい。
一尺ものの植木鉢に
根をまきながらやつと押しこむ。
ベランダの片すみ、

枝はやがて四方にひろがり
若緑からたくましい黒味へ。
風になびくやわらかさから
鋼のかたさにかわって
とげは鋭く空気を切る。
あとからあとから新芽がふきだしてくる
あきれるばかりの成長ぶり。
だがそれは見えないところで
いっそうはげしく動いていた。
鉢底の穴から根が伸びだし
コンクリートのすきまに食いいつて
そのまま伸びつづけ
中層建築の土台をゆるがしはじめる。
すこしずつ
確実に破壊をつづけながら
たらの木はさりげなく
白っぽい小さな花をつける。

舟

木 原 実

人通りのない朝の町を
小舟をかついだ連中がやってくる
声がかかつて
舟のあとについてゆく
大通りの信号をわたり
細い露地をぬけていった
と、角一つ曲ったところで
連中の姿がみえなくなつた
おかしなやつら
舟は川におろすにきまつている
川は古い商店街の裏を流れている
近道をしていそいだ
たてこんだ商店街は
もう店をあけている
どこかで街頭演説の声もきこえてくる

小走りに横町にそれてゆく
だんだん田舎の方へでる
畑を横切ると農家の庭先に入りこんでしまった
おれはどこで道をまちがえたんだろう
気がつく息子のバッグをさげていた
喰べのこしの菓子と小銭
ひとつかみとりだすと
菓子屑がぐにやりとうごきだす
人通りのふえた町のなかを
顔をふせて戻ってきた
みんなみている
梅雨冷えの表通り
寝巻きいちまいで歩いているおれのこと
舟の連中が消えて、はぐれて
おまけに道に迷って
そのことは誰も知るまい
立ちどまって顔を見てゆくやつもいる
連中がどうして消えたか
どうしておれが迷ったか
舟はどうしたか
誰に聞くわけにもいかぬ